



ほら吹き ピエロ



rico-k

ほら吹きピエロは空想好き

ほら吹きピエロは
空想好き

彼はピエロを演じて
皆を笑わせて満足していた

みんなも
そんな面白い
ピエロが大好き

だからピエロは
空想の世界を
街の広場でみんなに語った

寒い日には薄着で行き
暑い日にはコートを着た

彼は赤い花畑に行ったのに
青い花畑があったと話す

ウサギを見たのに
ライオンがいたと話した

しまいには
私はいずれこの国の大臣に
なるのだと言った

皆はそれが面白いと
笑った

いくつもの街を旅しては
ピエロは滑稽な話をしては
人々は笑った

ピエロはいつしか
何が本当で
何が嘘なのかもよく
わからなくなった

みんなが笑ってくれれば
それでよかった

ほら吹きピエロはとってもハンサム

ほら吹きピエロは
とってもハンサム

背が高くて
優しい眼差し
そしてオシャレ

ピエロの芸は
華やかで見事だった

街の女たちは
ピエロを一目みよう
広場に繰り出して

ピエロの芸に見惚れてる

残された街の男たちは
ピエロがいる日には
女たちに
とんと相手にされない

だんだん男たちは
面白くなって
ピエロの芸を見なくなった

だから
ピエロの元に集まるのは
老人か子どもか
女たち

男たちは街の喫茶店で
煙草の煙を漂わせて
いかにピエロが悪い奴か
話しこんだ

男たちは家に帰ると
女たちにピエロの
悪い話を伝えた

しかし女たちは信じず
男たちは尻尾をまいて
寝床についた

ほら吹きピエロは誰も信用しない

ほら吹きピエロは
誰も信用しない

だから
あるとき
財布が盗まれて
困ったときに
盗まれたとは誰にも
言えなかった

誰にも同情されたく
なかった

宿屋の主人が
集金に来たとき
ピエロはもう一週間
待ってくれと話した

田舎のお袋が
病で倒れてるから
金が要りようなのだ

主人は仕方が無いと
一週間待つことにした

ピエロは
広場に出て
芸をしてみたが
何故だかそういうときは
客がとんと集まらない

しかも
北風が吹き出して
来たものだから

街の人々はコートの際を立てて
ピエロの前を足早に
通り過ぎた

大家との約束の日が刻一刻と
近づいていく

焦ったピエロは
遠くの姉の結婚式に行かなくてはならないから
金を貸してくれないかと
八百屋のダンナに聞いてみた

ダンナは
女房が財布の紐を
握っているのだと
貸してはくれなかった

あるときは
ピエロは弟の工房を
広げるのに金が必要なのだと
定食屋の女将に頼んだ

定食屋の女将は金がないと断った

次第にピエロが金に困ってると
街の話題に上がるようになった

宿屋と主人はピエロの
お袋が倒れたらしいと
話した

八百屋のダンナは
姉の結婚式に行くらしいと
話した

定食屋のの女将は

弟の工房が拡大するらしいと
話した

どれも違う理由に
街のみんなは
首をかしげた
どれが本当なのだと

ある男がいった
ピエロは裏のマフィアに
金を借りたに違いないと

その男の女房は
ピエロにのぼせて
昨晚もそのことで
夫婦喧嘩したばかりだった

あいつはほら吹きが悪い奴だと
男たちは確信し
家に帰りその話を
女たちにした

次々に
ピエロにあったら
金を無心されると
皆気をつけろと
合言葉のように
声かけられた

次第に
大人たちは誰も
広場にはいかなくなった

そして広場には
子供たちだけになった

その子どもたちも
次第に見かけなくなり

野良犬さえ
何かを感じたのか
ピエロには
近寄らなかった

そして
ピエロは一人になった

ほら吹きピエロは 一人ぼっち

ほら吹きピエロは
一人ぼっち

そして
一文無しで
宿無しだった

家賃を払えず
宿を追い出されたのだ

他の街に行こうにも
旅費もなかった

冬の冷たい風が
ピエロのオシャレな
コートの間隙を
突き刺すように
入ってくる

広場でぼんやり
客が誰か来るのを
待って何日か過ぎ去った

ピエロの食糧も大分つき
一日パンをひとかじりするのが
やっとだった

あるとき
悲しい顔をした
美しい娘がピエロの
横を通り過ぎようとしていた

ピエロは
あんたはそんなに

若くて美しいのに
何をそんなに悲しむことが
あるのかのか
と聞いた

娘は
どうすれば幸せに
なれるのか分からないから
悲しいのだと答えた

ピエロは
この娘に
得意の面白い話をした

すると娘の顔は
悲しげな様子から
優しい顔に変わり
しまいには大声で笑い出した

あっはは
あはははは

娘は幸せは自らの内にあると
気づき幸せな気分になった

娘はピエロに
お礼に何か
欲しいものはないかと
聞くと

ピエロは何もいらないと答えた

娘はカゴに入った
パンをひとつ
ピエロに差し出した

以来娘はピエロのいる広場に
毎日通うようになった

街のみんなは
口々に
あんなほら吹きに
近づいちゃいけないと
娘に言ったが
娘は聞かなかった

毎日訪れては
話を聞きパンを渡した

ピエロの話は
街のどんな人たちよりも
遠くの世界に行けた気がした

ピエロも
信用してくれる娘には
ホラをふくことは
できなかった

しかし娘は
街のみんなから
ほら吹きピエロの仲間だと
思われ
娘も孤立して行った

娘は悲しかったが
さびしくはなかった

ピエロの真実を
知っていたからだ

ほら吹きピエロは不幸せではなかった

ほら吹きピエロは
不幸せではなかった

ハンサムな顔は痩せこけ
オシャレな衣装は
汚れくたびれた

あるとき
その地域をおさめている
王様が街にやってきた

王様は誰か城の知恵者を
探していたのだ

ある問いをだそう
それに答えられるものがいたら
私のもとに来いと
王がお触れをだした

民が幸せに感じるためには
どうしたらよいか

それが王の問いであった

一週間のちに
この広場にて
王の問いに答えること
になった

街の人々は
街角に集まっては
知恵を絞った

きっと褒美がもらえるに

違うないと

一週間たって

街中の人々が広場に集まった

ピエロと娘は

その広場の片隅に座って

様子を見ている

次々と王のところに

考えを披露しに行く

あの宿屋の主人が

王の前に出て話し始めた

王様

あなた様のような

りっぱな方が

街を治めれば

これまでのように

民は幸せでいられます

王様は

フンと鼻で笑うと次に促した

八百屋のダンナは言った

王様

隣国の農業は大変

良いと聞きます

隣国を滅ぼして

その領土を

我々のものにすれば

民は裕福になります

ふむ

王様はうなった

そのとき若い娘が
クスリと笑う声がした

王は近くまで来ていた娘を
目に止めた

笑ったのは
お主か？
なぜ今の話に笑うのだ

王は聞くと娘は答えた

大変失礼しました
でも王が探している答えは
きっとあそこに腰掛けている
ピエロなら
お答えできます

王が指さされた方に目をやると
風雨にさらされて
くたびれたピエロが目に入った

王が話しかけようとする
八百屋の主人が
王を止めた

王様
そのものは
ほら吹きにございます
若い娘をたぶらかして
そう言わせてるに
すぎませぬ

王は八百屋をチラリとみたが

そのままピエロに近づくと
ピエロに話しかけた

ピエロよ
お主ならなんと答える？

王はピエロまで近づくと
問いました

王様
こんな乞食のような
身の上に
そんな答えが言えましようか？

ピエロは答えたが
王はさらに聞いた

お主は乞食のような
身なりをしているが
どこも不幸せには見えない
その理由を教えてくれないか

ピエロは
答えた

恐れながら王様
私は宿を追い出された
乞食の身の上でございます
しかしながら
私が幸せだとすれば
私を信用してくれる
者がおり
笑いに日々溢れてるからで
ございましょう

王は続けるように

促した

私はたくさんの街を
芸をしながら旅して
まいりました

その中で
幸せそうな
街では決して
豊かではありませんでしたが
彼らは
影口は叩かず
人を妬まず
自らの幸せを知り
人を信用する力を
もっておりまして
街にはいつも笑い声で
溢れておりました

食べ物は分け与え
感謝の念を忘れず
勤勉に働きました

して
そうでない街は
どうだったのか？
王が問うと
ピエロは答えた

あるとき私は裕福な街に
訪れました
そこは市場に食べ物が
溢れてると言うのに
人々は悲しい顔をして
おりました

なぜなんだと聞くと
食べ物は高くても
庶民の手に入らないのだと
彼らは答えました

それらの食べ物は
貴族たちの腹に収まるばかりで
富めるものは
ますます欲深く

貧しいものは
卑屈になるばかりで
隣人の影口に時間を費やしては
日々を過ごしておりました

その違いはいかにして
生まれるのだ？

王は聞いた

その違いは
リーダーに立つものが
率先して慈悲の心を持てば
民もついてまいります

影口をたたくことも
恥ずかしくなり
人々は勤勉になり
確実に幸せな街になりましょう

それにはやはり
豊かな穀物が必要ではないか？
隣国にそれがあれば
奪えば豊かな国になり
そしてリーダーが
慈悲深くなればますます

良いのだな

王様

それは違います

ピエロは静かに答えた

隣国に責められては

ありませんが

隣国にこちらから攻めいれば

味方のうちには死ぬものも出て

その分働き手がいなくなり

未亡人になった女たちが

悲しみ苦しみます

隣国が豊かそうに見えるのは

豊かなものが貧しいものから

搾取しているだけでございます

もし民の幸せを

考えるのであれば

慈悲の心で皆が暮らせば

良いのでございます

そこまで聞くと

王はうなった

ピエロよお主は

そこまで賢いのに

なぜそのように

乞食の風体で

ピエロをやっておるのか？

ピエロは答えた

王様

他の人ができることは
その人たちに
任せればよいのです

私には私しか
できないことを
するまでです

せっかく
この世で時を過ごすのならば
世間体を気にすることなど
持たないないことでございます

私の身なりが汚れて
おりますのは
家賃が払えず宿無しに
なってるからで
ございましょう

なぜ宿なしなのだ？

王が聞くとピエロは
答えた

実は
財布をなくして
宿代が払えず
こうして
広場に寝てるのです

お主はピエロではないか
稼げるだろうに

私はほら吹きピエロと
言われますように
正直には街の人に

理由を説明できませんでした

今となっては
何故だかわかりませぬが
本当の理由を言う
方法がわからなかったのです

私は信用を失い
そして
悪い噂は
病原菌のように
あっという間に
街を駆け巡ります

それゆえ
芸をしても
客が集まりませぬ

人々はざわめいた
きっとまたホラを吹いてるに
違いないと

王様はふむとうなった

では今は
嘘をついていないと
どうすればわかる？

だれも証明はできませぬ
ただ
今はあの娘が
私を信用してくれました
だから私も真実を
人に話すことが
できるようになりました

ウソは不信を呼び
真実は信頼を呼びます

王様は
あはははは
面白い

と大声で笑うと
ピエロの顔をじっくりと
眺め
そのまま
城に帰っていった

ほら吹きピエロはいなくなった

街では
王とピエロのやりとりについて
持ちきりだった

そして
しばらくたって
ピエロの姿は
広場から見えなくなった

皆は別の街に移ったんだろうと
噂した
そしてピエロがいたことさえ
人々はわすれた

そして街からは
もう一人
若い娘も消えていた

どうなったかって？

あの王の問いがあってから
しばらくたって
ピエロは城に呼び出されたのだ

ピエロは王の側近の
ひとりとして
迎えられ

娘はというと
ピエロを信じた褒美として
城の厨房の仕事に
雇われたのだ

さて残された街の人々は

どうなったかというと

ピエロの話が飽きると
皆は昔と変わらず
噂話に時間を費やしては
生活に
追われる日々にもどった

だけど違ったのは
街が少しばかり活気付き
市場に民が買える品物が
あふれるようになり
怒り声よりも
笑い声が聞こえるように
なったそうだ

ほら吹きピエロ

平成25年3月18日

<http://p.booklog.jp/book/68394>

著者 : rico-k

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/rico-k/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68394>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68394>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ